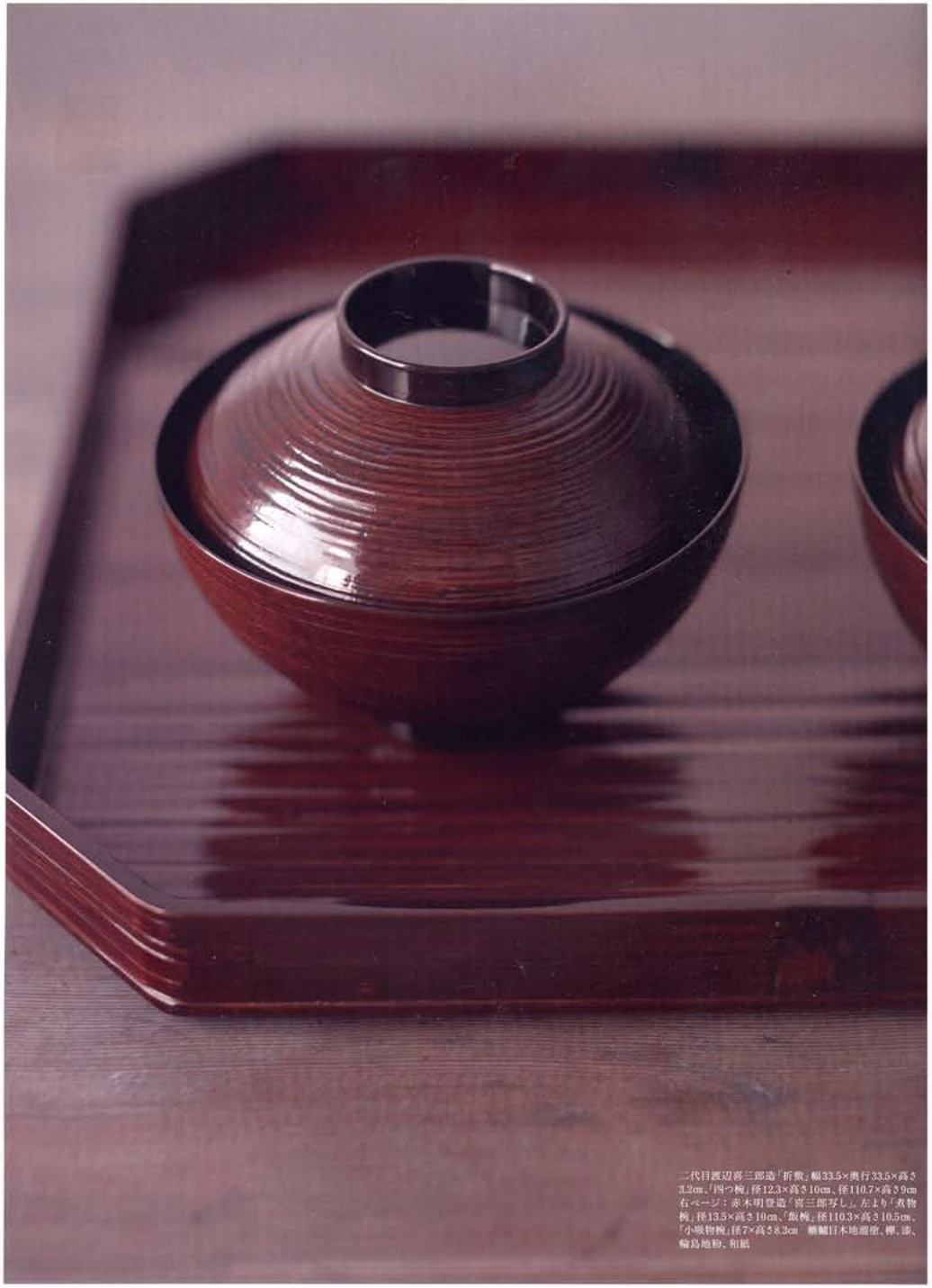
塗師の歳時記　第三回　喜三郎の滋味

文　赤木明登



二代目渡辺喜三郎造「折敷」幅33.5×奥行33.5×高さ3.2cm、「四つ椀」径12.3×高さ10cm、径11.0.7×高さ9cm　右ページ：赤木明登造「喜三郎写し」、左より「煮物椀」径13.5×高さ10cm、「飯椀」径11.0.3×高さ10.5cm、「小吸物椀」径7×高さ8.3cm　轆轤目木地漆塗、柳、漆、輪島地粉、和紙

「漆の仕事をしているのなら、このくらいのものを持っておきなさい」という突然の手紙を添えて、大きな荷物が工房に届いた。「必要なときには、返していただくので、それまではあずけ置く」と。

中身は、茶事のときに使われる懐石皆具。折敷、四つ椀、煮物椀、小吸物椀、飯器、杓子、湯桶、湯の子すくい、通盆、脇引、一式がそれぞれ木箱に納まっている。箱の蓋にはひかえめに「喜三郎」の銘と落款がある。二代目渡辺喜三郎の造である。

漆をさわる者でなくても、それがとてつもなく良いものであるとわかる。箱から取り出した瞬間から、何かが爆然と輝いて、人の心を器に引き込んでいく。送り主は、銀座にかつてあったギャラリー「無境」の主人。

この仕業には、さすがに「うむむむむぅ」と唸ってしまった。一度広げてみたものの、すぐに気圧されてそそくさと仕舞い込むしかない。いったいこんなものが、僕の手元にあっていいのだろうか。

塗師・喜三郎は、明治の茶人・益田鈍翁に重用された職方。先祖は京都鷹峯にあった光悦村の住人で、やがて江戸に下り、明治以降も三代つづく。明治の初代喜三郎以前の作は伝わっているものがない。直に鈍翁の薫陶を受けた二代目以降は茶の湯の世界に多くの作を残しているが、美術館に出かけるか、よほどの茶事に呼ばれないかぎり目にすることはない。薄挽きの木地に薄塗りの名手である。

椀の外側は、轆轤目をそのままに木地を蘇芳で染め、透漆を薄く塗って仕上げる。艶美な赤がほのかに透けて見える。折敷も完璧なる作為の鉋目に同様の塗り。煮物椀は太目筋、小吸物椀は荒目筋と、轆轤目を変化させ、微妙に表情が移ろっていく。この軽やかさ、品の良さ。家人が寝静まってから、そっと手に取り撫で回し、ため息をつくばかり。

持ち主の茶事のたび、皆具は僕の手元を離れ、やがて帰ってきては余念のない手入れをさせていただく。そんな日々が三年ほどつづき、僕はようやくその写しを仕上げ、同時に六種類の新たな懐石皆具の製作に没頭し、「無境」で展覧会を開いた。そのときに得たもの、つまり栄養は、僕の作るすべての器に染みこんでいった。

画廊主人の工人に対する見事な教育であったのだ。

残念なことに、「無境」は三年前の秋に店を閉じてしまったが、主人の御厚情とともに皆具一式は今も僕の手元に残り、新たな器を生み出す源となっている。

あかぎ あきと｜1962年岡山県生まれ。輪島塗の下地職人・岡本進のもとで修業、94年に独立。97年、ドイツ国立美術館「日本の現代塗り物十二人」、2000年、東京国立近代美術館「うつわをみる 暮らしに息づく工芸」に選ばれる。著書に『漆 塗師物語』（文藝春秋）、『美しいもの』『名前のない道』（ともに新潮社）など。www.nurimono.net/

写真 雨宮秀也